

氏 名 (本籍)	阿 部 希 望 (栃 木 県)
学 位 の 種 類	博 士 (農 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 6120 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	生命環境科学研究科
学 位 論 文 題 目	近代における野菜種子屋の展開と役割

主	査	筑波大学教授	博士 (農学)	加 藤 衛 弘
副	査	筑波大学教授	博士 (農学)	茂 野 隆 一
副	査	筑波大学教授	農学博士	大 澤 良
副	査	筑波大学准教授	博士 (文学)	湯 澤 規 子

論 文 の 内 容 の 要 旨

本研究は、近代日本の種子屋の史的分析を通して、明治中後期以降の野菜生産の新たな動向の中で、種子屋がどのような役割を果たしたのかを実証的に解明することを課題とした。これらの課題を追究するために、本研究では第 1 に、近世から近代を連続的に捉えることを通して種子屋の近代における展開の特質を抽出することに努めた。第 2 に、種子屋の専門分化や階層性を考慮するとともに、種子屋相互の関連性に着目した。

第 1 章では、全国的な野菜生産の発展及び種子需要の展開を検討した。勸業政策による外来野菜の導入、都市の発達を背景とした野菜需要の拡大、輸送・集約園芸の進展によって、明治中後期以降、野菜の商品化が急速に拡大した。こうした野菜生産の展開と連動するように、農家の種子需要は質・量双方の変化を伴いながら拡大した。これを踏まえ、第 2 章から第 4 章では、①種子問屋、②採種管理人兼種子仲買商、③種子小売商を取り上げ、一次史料に基づき、種子需要の拡大期における種子屋の経営展開と役割を分析した。

第 2 章では、近代日本の一大種子集散地として発展した東京府北豊島郡の「種子問屋」である榎本泰吉家文書を中心に検討した。種子問屋は選抜育種による固定種（原種）の育成、同業組合による組織的な品質管理体制の強化、原種と前貸金の提供を通じた委託採種、通信取引による特産種子の相互取引を背景に、高品質かつ多種多様な種子の品揃えを充実させ、近代日本における種子生産・流通の中核的機能を担った。第 3 章では、東京府北多摩郡の「採種管理人」兼「種子仲買商」野口平一家文書と関連史料を分析した。明治中期以降の種子需要の拡大や東京市近郊に成立した本場採種地帯の都市化に伴い、種子問屋は北多摩郡に作場を求め、採種管理人を配置することで委託採種による新たな体制を構築した。野口家はそうした採種管理人一つであり、同家は、商品野菜生産が最も顕著に進展する東京市及び横浜市近郊農村地帯の中心に位置する地域特性を活かし、明治後期以降、種子の卸売販売を展開させる種子仲買商となり、さらに「地方種子問屋」へと発展していった。

大都市近郊の種子屋の展開に着目した第 2・3 章に対して、第 4 章では地方都市近郊に目を転じ、新潟県北蒲原郡の「種子小売商」高橋熙家文書の中核に据えて分析した。北蒲原郡は新潟市近郊の農村地帯であり、稲作を基盤にしつつも、明治後期以降、新潟市における野菜供給地として発展した。こうした過程で高橋家は、当主による行商形態から商店を構えた経営に移行し、通信取引による種子の大量購入、委託採種の開始、

売り子の雇用、定期市への出店を図り、種子の取引軒数を著しく増加させた。年々増大する種子需要に対し、昭和期に入ると、売り子を増員するとともに、置種システムを導入し、その対応を図った。

以上、近代における野菜種子屋の展開と役割をまとめると以下ようになる。明治中後期以降の商品野菜生産の発展に伴う種子需要の拡大期において、その供給主体である種子屋は、①種子品質、②種子生産、③種子流通の3つの側面で、近代日本の野菜生産の発展に重要な役割を果たした。具体的には、①市場向けに大量流通させる商品野菜の必須条件として、収穫する野菜品質の斉一性が挙げられる。こうした野菜品質への対応として、種子の高い斉一性が求められた。このため、種子屋は選抜育種技術を確立するとともに、同業組合による組織的な品質管理体制を強化し、高品質な「固定種」を育成することでこれに大きく寄与した。②商品野菜生産の発展によって、種子需要が増大・多様化した結果、種子の生産・流通過程において分業体制が構築された。すなわち、生産過程では問屋による採種農家を組織化した種子増殖システムを確立し、作場が遠隔地に移転する過程では採種管理人を配置し、採種管理体制の強化を図った。③流通過程では種子問屋、種子仲買商、種子小売商による全国的流通網が形成され、各地の特産種子の相互取引と安定供給体制が整えられた。これにより、近代の野菜生産農家は各地の特産種子を入手することが可能となり、均質な野菜の増産を実現したのである。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、農業史研究において等閑視されてきた近代日本農業の展開に関する研究であり、農業の基盤となる種子生産、特に研究蓄積のなかった民間主導の野菜種子の改良と生産・流通に焦点を当てた研究である。近代の市場から求められた野菜の質と量を確保する上で、決定的な意味を持つのは種子の斉一性であった。本論文は、それを担保する固定種の育種と、その増産・大量流通システムを、一次史料の分析によって初めて体系的に解明し、民間育種家が果たした役割を明らかにした。この点がまず高く評価されるとともに、今後の研究の発展が大いに期待される。経済史研究の観点からも、在来産業の中核に位置する農業についての研究は養蚕業を除くと少なく、農業の近代における新ステージの到来を実証的かつ明確に解明した研究として重要である。

野菜種子の育種は近世より始まるが、そこで生み出された在来種は近代の市場から要求される斉一性を担保できなかった。近代の種子問屋は選抜育種を繰り返して遺伝形質の斉一な固定種を作り出した。この固定種が近代の野菜産地形成を可能とし、かつ第二次大戦後に開発され一般化される一代交配種 (F_1) の原種となっていく。本論文は、近代はもとより現代農業の革新的展開を解明する基礎を築いた点からも高い意義が見いだせる。また、開発途上国における市場の発展に伴う農業改良の方向性を比較考察する上で、種子の分野について日本の経験という情報を整理し提供した意味は大きい。

平成24年1月24日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもとに論文の審査及び最終試験を行い、本論文について著者に説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員によって合格と判定された。

よって、著者は博士（農学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。